

人をくすぐる事を覚え、母など 足袋をぬげば
すぐ足をくすぐる

子供の不思議

沼田笠峰

青葉若葉の滴る木蔭に座つて、可愛らしい稚児
は、赤く熟した林檎をかじりながら、ふと不思議
の念を小さき胸に浮べた。この世の光を浴びてか
ら、まだやう／＼五ツ年ばかりの幼い身にも、解
きたい謎は様々あると見える。先づ第一、不思議
で不思議でたまらないのは、あの大空に高く懸つ
て居る所の、大きな／＼火の玉なのです。

『毎日々々、青空を徐ろに歩いて、夜が来ると、
どこか見えない處へ行つてねんねする、あの火の

やうに燃えて居る玉には、大方鎖が附いてるんだ
らう。だけれども、その鎖はどんな所から始まつて、
どこにくつ附いて居るのか知ら。そしてもし、そ
の鎖が途中で切れて、大きな火の玉が落つちて
来たら如何だらう。それを大變、きつと人も鳥
も草も花も、みんな焼け死んぢまふねエ。イヤ
／＼、人は焼け死んでも鳥は死な、いだらう。…
……でも鳥には羽があるから、すぐあの冷やりし
た青空へ翔けて行つて、柔らかな白い雲の中へか
くれてしまふに決つてる。あそこへ行けば、何が
来たつて大丈夫、焼けつこなしさ。』

『どうかして、私も鳥になりたいなア。そした
ら、すーつと高い所まで飛んで行けるから、あの
白い雲が何で拵らへてあるのか、見てくるものが

出来る。一躰、雲は羊のやうなものか知ら、大方
 そうだらう。羊が牧場で追つかけつこなんかして
 遊んで居るのと同じ様に、雲も、ホラ、動いてる
 じやないか、あんなにして遊んでるんだよ。そし
 て、青空は恰度羊が喰ふ草のやうに、雲の食物な
 のだらう。』

と思つて見たこともあつたが、それは彼がモット
 小さかつた時のことで、だん／＼成長するに随つ
 て、少なくとも雲は羊でないことを知るやうにな
 り、また時によると、どうしても、雲は動物のや
 うに見えないと思ふこともあつたが、しかし雲も
 人と同じやうに物に感ずることを確かめて居た。
 なぜなれば、『地上に涙を流すでないか』と。人は
 これを稱して雨と言つて居るのである。

二

この世界に數ある物の中で、小さな子供が最も
 愛して居たものは、庭の林檎の樹のあたりに咲く
 草花であつた。

『何時だつたか寒い／＼日に、私はお母さんと
 一緒に、この黒い土を掘りかへして、何だか堅い
 ものを、その中へ投げこんで置いた。お母さんは
 それを種子だと教へて下さつて、そして春が來た
 ら花が咲くんだつて。それから私は毎日々々其處
 へ水を撒いて、どんな花が出て來るか待つて居た
 のです……随分いくつも寐てからだつた、先に
 種子を入れておいた土の中から、少し青いやうな
 芽が出て來て、それからだん／＼綺麗な葉が繁り、
 美しい色の花が咲いて、立派な木になりました。
 『たつた一ツ、どうも私の氣に入らないことが
 あるの。何ッて？ どうしても花が咲く所が見ら

れないんだもの。何時でも、如何して花が開くだらうと思つて、木の傍に番をして待つて居ても、一ツも見られない。それで朝早く〜起きて、椽側へ行つて見ると、ほんとに花は目が醒めるのが早いんだねエ、もうチャント咲いて居るんですよ。』

三

昨日も今日も、幾日となく照り輝く暖かな清らかな日が続くので、子供は全く一生涯こんな暖かな日なのだらうと思つて居た。ところが、俄かに、時によると寒い〜夜があることを知つたので、彼はまた考へ始めた。

『私はこんな暖かな好い寐床を持つて居るけれども、花は随分寒いことだらうねえ。きつと今頃は泣いて居るに違ひない。花は、いくら冷たい風

が吹いても、いくら日が入つてからでも、何も被るものを持つて居ないから、さぞ困ることだらうよ。』

と思つて、直に自分の小さな白い毛布を持ち出して、花の周圍から被せてやつて、『斯うして寐ねするんだよ』と言つて、やさしく敲きつけてやつた、恰度彼がお母さんに爲てもらふやうに。

斯んなに注意深く彼が愛憐つてやつたにも拘はらず、もはや花は、これまでの様に幸福な美しい色を示さなくなつた。その小さな美しい頭は落ちてしまつて、再び若い芽を出さない、林檎の木は、また黄ばんで来て、風のまに〜散り布く地上に哀れさを現はし、やがて鳥も鳴く聲を止めて、一羽去り二羽飛んで、青空の方へ影をかくしてしまつた。子供の驚愕は一通りでない、あの

空にかゝつて居る大きな玉の、強い火が消えてしまつて、すべての人間も鳥や花と同じ様に、横に倒れて永き眠りに入りてしまはねばならないかと怪しんだのである。

四

或る朝、彼は窓の下へ行つて、太陽がまだ例の場所に高く懸つて、燃えつゝあるかを確かめやうとしたが、驚くまいことか、彼の見渡すかぎりは、白い羽のやうな片々が、静かに音もなく大空から落ちて來るのみで、それが地上のすべてのものを蔽うて居る、恰も寐床に於ける白い毛布が、彼れを包むかのやうに。

そこで彼れは、氣も心もいら／＼してしまつて、あの可愛らしい花も矢張この白い毛布の様なものに蔽はれて居るかを見やうと思つて、表へ駆け出

した。而してその白毛布を外へ押し除けてやつて、見ると哀れにも、彼の花は萎んだまゝ、硬くなつて仕舞つて、地上に冷たさうにくつ附いて居る。まるで、猫の鋭い爪に引つ搔かれて死んだ雀の子のやうなんだから、可憐さうでたまらなくなつた。

彼は大急ぎでお母さんの所へ告げに行つた。黒み勝ちの活々して居る彼の眼は、この時、涙が一杯い漲つて、やさしい胸には驚愕の情が溢れて居た」

五

お母さんは、強き慈愛に充ちた腕に、愛しさその子を抱きしめて、自然界の大いなる驚くべき真理が、めぐりめぐる變化を正しく攝理して、決してその序を違へないことを語り聞かせた。如何なる花も、草木も、河の流れも、昆虫も、鳥も、獸も、

決して死ぬのではない、たゞ彼れ等の永き夜を通
して、静かに眠つて居る、而してそれは冬と呼ぶ
のである。うらうらゝ霞む暖かな日が来て、野にも
山にも朝の榮光を浴びせるやうになつたならば、
彼等は、幸福な静かな永い眠りから醒めて、再び
新しい美しい生々した春を飾るのである。かく
して春、夏、秋、冬、とこしなへに變ることなく、
大いなる神の攝理の下に繰りかへされて、花も、
鳥も、我も、汝も、すべてのものが安らかに生活
を営むのであると。

* * * * *
子供は、お母さんの教訓を聞いて、ながい間の
疑問を解くことが出来、幼稚園へ通ふやうになつ
ては、先生から色々な道理を説き聞かされて、日
は一日、成長するに随つて賢い人になるのである

が、その始めは、母なる人のやさしい説話を待た
ねばならないのである。

フレーベル會俳句端書集

- 一、課題 當季雜吟一人十句以下
- 一、締切 九月二十五日限り
- 一、披露 十一月發行本誌文苑欄
- 一、賞品 天地人三座には最品を呈す
- 一、撰者 當分本會の撰とす、
- 一、投稿 本誌購讀者は何人にも投稿する事を得用紙は繪葉書
に限り(眞筆刷物隨意)住所氏名雅號を明記し必らず左
の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第十四回俳句端書集

藪寺や木魚叩けば蚊のわめく 東京 辰子
蓮提て鳥居潜らぬ女かな 全
澁團扇舩の顔にのせてあり 全